

柳川先生と Robert J. Lifton の事

宮 崎 賢太郎

(昭和 50 年卒業)

昭和49年の秋、私は学部で4年生で、栄光ある東大剣道部主将の重責にあえぎながらも、迫り来る卒業論文に没頭(ボート)していた。当時、弥生門を出てすぐの弥生町の“雀苑”という名のついた古い瀟洒な屋敷に下宿していた私は、いつものように昼すぎに下宿を出て研究室へと向っていた。

細い露地を曲ると、10メートル位前から両手をポケットにつっこんでフラフラ・トボトボと歩いて来るのは、何と畏敬する柳川教授ではないか。当時先生は『宗教学辞典』の編纂で多忙を極め、疲労の極にあられたのであろう。咄嗟にもう逃げ出すわけにもゆかない。かといってコンニチワと通り過ぎるのも間の悪い思いがした。ここは何か私も少しは学問的悩みを抱えて生きているのだということを示すべく、サビついた私の頭は瞬時にフル回転を始め、やっとひとつの質問を得た。

当時キリシタンの殉教精神の宗教心理学的解明という途方もないテーマを抱え、一条の光も見出せず苦悩し続けていた私は、単刀直入にこの問題の解決についてその手がかりを請うたのであった。先生は細い御目を閉るかのように更に細くして天上を仰ぎ、しばし神の声を待っているかのようであられた。突如「リフトンの『Revolutionary Immortality』を読みなさい。明日研究室に持ってきてあげるから。」と言われた。私にはその声がいまだかつて聴いたこともないような神聖な神の声にも思われ、これできっと苦悩の淵から救われるに相違ないと確信した。

翌日お借りしたペリカン・ボックスの表紙には

副題として「Mao Tse-tung and the chinese cultural Revolution」とあり、毛沢東の写真がイエズス会の紋章のような金の後背を伴って燦然と輝いているのではないか。“キリシタンと毛沢東”とはこれいかにと考えたが、きっとキリストが毛沢東に託身されたものに違いないと気付くのにさほど時間は要しなかった。しかし、そこにはきらめくような問題解決のカギが潜んでいるに違いないと必死に読み進めても、神は沈黙を保ったままで、ますます暗黒のカオスへと足を踏み入れるばかりであった。

何とかデッチあげ、『キリシタン武士の殉教精神』と題した卒業論文の口答試問の日、田丸先生から突きつけられた質問はまさしく天啓であった。「あなたはこれを護教的立場から書いたのですか」と。東大の宗教学の伝統を必死に守るべく、客観的科学的実証的であろうとした私の努力は見事に美しい信仰告白の書として結実していたのであった。

こうして私は柳川先生始め、研究室の諸先生方の薫陶を全く無駄にして、最良の異端児としてめでたく卒業し、現在は宗教社会学と偽称して、教壇にて目を細めながら天を仰ぎつつデュルケームだフロイトだリーチだと宣い、あげくの果てには世俗化論にまで説き及んでいるのである。

柳川啓示先生願はくは新しき大学においては過度の象徴解釈を要しないような啓示を若き学徒に授けられますように。柳川先生とお酒にまつわる話に移れば限りなき故、まずまずこの辺で筆を止めたく存じます。

御身大切になさいますよう心より祈念しつつ。